科目区分：学校教育実践コース(国語教育専修)
授業科目名：書写書道概説

「書写書道概説」授業報告

国語教育講座・東　賢司

１．授業の概要

書写書道概説は、中学校教員免許(国語)を取得するための必修科目である。平成２２年度入学生(現在の４年生)までは、１年生後期に開講していたが、履修単位数の上限の設定や専修振り分けが１年生後期になったことの対応のための開講学年･学期の移動のために、３年生後期の開講になった。また、従来別枠で開講していた国際理解教育コースの学生で国語免許の取得を希望する学生も、３年生後期から半年間遅らせ、同時開講にした。学生からは「開講時期が遅い」という指摘を受けているが､「入り口科目から出口科目への移行」を訴えて、より高い書写技術力を身に付けるように呼びかけている。

(1)シラバス等

この授業の目的と到達目標について、シラバスには以下の記載をしている。

【授業概要】
中学校ではじめて学習する書体は､行書という書体です｡文字を正しく整えて書くことはいうまでもありませんが、中学生では､それに加えて速書の能力が求められます。この講義では、行書学習を行い、行書に調和する平仮名やカタカナの学習を行い､それを日常の文書である漢字仮名交じりの文書を書けるよう展開してゆきます。正確な筆順と安定的な書き方を学び､教師としての知識や技能を高めてほしいと思います。
【到達目標】
（1）知識・理解…国語の書く行為の重要性を理解し､教師の教養として必要な文字を書く知識や情報を身につける。
（2）技能･表現…中学校での学習内容（字形の整え方、行書の書き方、効果的な文字の書き方等）を体得し、漢字・仮名の文字が正確にわかりやすく書くことができる。
（3）態度…自信を持って自ら進んで丁寧に書こうとする姿勢を身につける。

(2)内容の概要等

第１回　概要説明、硬筆技術力の確認
第２回　漢字を整えて書くポイント
第３回　(毛筆)楷書許容体の学習
第４回　楷書と平仮名の調和
第５回　行書の線質　終筆の変化
第６回　行書の線質　方向の変化
第７回　行書の線質　長さの変化
第８回　行書の線質　筆脈の実線化
第９回　行書の線質　点画の直接連続
第 10 回　行書の線質　点画の省略
第 11 回　行書の線質　筆順の違い
第 12 回　行書の線質　概計と文字の中心
第 13 回　行書の線質　文字の中心
第 14 回　行書の線質　小筆、細字
第 15 回　まとめ

学習内容は、毛筆を講義中に行い、硬筆は時間外学習で行い、何回かに一回作品ファイルを提出させて、添削した課題を返却するという形を取った。教育実習などでは講義中に学習したことの定着ができていないことを多く見かけている。このために、この講義でも、①毛筆は硬筆の基礎であることを確認する、②硬筆は授業中の毛筆学習を基礎とした行書の字形を見につける、③楷書学習と行書学習の相互の補完性を意識する、という三点を重視した。

硬筆教材を時間外の課題としたのは、講義時間の短さが影響していることが大きな理由であるが、発展的な課題を検討し、身につけにくい課題を設定することにより、学習者に緊張感を与え、問題意識を高めてもらうという効果をねらった。

２．授業時間外学習の促進

授業時間外学習の促進については数年来力を入れている｡講義を実施するにあたっては、シラバスの作成から意識して働きかけをした。授業時間外の学習に関する記述をシラバス内に反映させた箇所は２つある。

(1) 授業時間外学習にかかわる情報

１．毎回の時間に課題を出しますが、その課題が終了しなかった場合は、次回までに完成させて下さい。
２．筆順などの確認作業は、指定された講義の前に行って下さい。
３．実技練習は、多くの時間を自宅学習で行っていただくことになります。日常の硬筆・毛筆の練習を欠かさないようにし、大学生として必要な実技力を身につけて下さい。
４．実技力の水準が基準に及ばない場合は、課題を追加することがあります。

(2)受講条件

3.受講生全員、「学年別漢字配当表」「学年別漢字配当表以外の常用漢字」に掲載の漢字の筆順を理解しておくことが必要です。
4.事前に正しい筆順の理解・平仮名と楷書の硬筆毛筆の練習を十分行い、講義のスピードについて来られるよう準備して下さい。

この記述に従って確認したことは、第一に楷書の筆順が正確に書けるかである。常用漢字小学校配当漢字中の中から筆順確認を行い、また授業内で行う毛筆学習での様子を見ていたが、時間外学習の効果が十分表れていないと判断されたために、１２月中に板書の字形確認を含めた筆順テストを実施した。

１人５分程度の作業であるが、書道教室の黒板に文字を書かせ、その正答率と字形の正確さについて確認をした。

７割程度の受講生は正答率が８割を超えていたので、効果はあったと思われる。実際に授業の毛筆学習中も筆順の間違いは少なくなった。

次に、行書の定着の確認である。冒頭に述べたように、小学校と異なる学習内容は行書の理解である。歴史的には行書体は楷書体よりも早く成立し、行書体から楷書体ができているのであるが、現在ではあまり使用されない書体であるために、行書のくずし・連続性や筆順は理解が難しい。中学校までの段階でも､扱う文字は２０００文字近くになるので、その全部を講義中に説明することは難しい。行書を効率よく理解するためには、行書で部首が書ける事が重要になるので、行書部首の一覧表を配布し、これを覚えることを時間外学習の課題とした。

また、授業中に印刷配布している資料は、全国大学書写書道教育学会が編集した『書写指導』からの抜粋であるが、これらは、毛筆学習と硬筆学習を関連付けるために、毛筆教材と硬筆教材を並べて提示するようにしている。教材を配布する際に、硬筆の学習をしておくように指示し、授業内の区切り区切りで行書の硬筆の確認を行った。応用力を付けることは難しいが、これも授業時間外学習には効果があったと考えている。

３．学生の反応

年明けの授業で、学生達には、作成する作品の中で、これは自信を持って見せられるものを作るよう(示すよう)指示をした。先に記述したように、小学校・中学校で学習する情報漢字は２０００文字近くあり、これを組み合わせて作られる教材は相当の量がある。ただ、書写の場合は、一つの作品(文字)が正確に書けるようになることで他の作品に好影響を与えることも事実である。この効果に期待し、適否の判断の学習も兼ねて「自信をもって示すことができる作品」を授業のコメントをつけて提出するよう指示した。

学生から示された作品の傾向やコメントは以下のようなものがあった。

・筆を半紙から離すタイミングに苦労した
・授業中の作品作りに納得できず、自宅で取り組んだ作品が一番よかった
・払いから次の画への繋がりが理解できた
・画の太さとバランスが相関性があることがわかった
・筆順が変化することにより、スムーズな筆運びができることがわかった
・文字の外形に注意した
・筆脈を意識して書くことができるようになった
・行書らしい線質で書くことができるようになった
・行書になると形の変化が大きい文字のリズムを捉えて書くことができた

これらのコメントは楷書学習だけでは生まれない専門的な技術が身についた時に発せられる感想であり、意味のある学習ができたと捉えられる。